

朽網のキリシタン

成田 勝

萬葉集卷第十一に「朽網山くたみやま夕居ゆゑる雲の薄れ行かばわれは恋ひむな君が目を欲ほり」の歌があり、その大意は「朽網山に夕方かかっている雲が薄れて行つたなら、私は恋しく思うであろう。わが君の顔が見たくて」とされている。この歌の「朽網山」は現在の「久住山」の古名であり、その東側一帯の地域が、かつての「朽網」であった。すなわち、久住町のうち都野、直入町の全部、野津原町の今市および庄内町のうち阿蘇野をふくむ地域である。地図で見ると大分県のほぼ中央部に位置しており、かつては山間の僻地であったが、現在は道路が整備されて、自動車ならほぼ一時間で大分市に出ることができ、朽網と大分市との時間距離は大きく縮められている。しかし中世の「朽網」はこのような現況とくらぶべくもなく、山を越え谷を渡って行かねばならない交通不便な土地であった。この朽網にいち早くイエズス会士達が足を運び、キリスト教の布教が行なわれたのである。そのこと自体、ひとつの奇蹟であった、といえようか。朽網における布教は一五五四年（天文二十三）、府内（大分市）のキリシタンであるアントニオがここに入り、のちになってルカスと呼ばれるようになった「大家族を有する一老人」を帰依させたことに始まるのである。

ここで朽網のキリシタンについて述べる前に、先ず豊後でのキリスト教のはじめについてふれてみたい。

フランシスコ・ザビエル師が「ポルトガルの友人」である大友義鎮（宗麟）に会い、豊後にキリスト教を伝えたのは、一五五一年（天文二十）、今から四百三十余年前のことであった。彼は二か月半ほど府内に滞在、義鎮に対して人格的に大きな影

響を与えてのち、インドに向けて帰っていったのである。そして翌一五五二年（天文二十一）、バルタザール・ガーゴ司祭ら
が来日した。ガーゴ司祭は一五六〇年（永祿三）に豊後を離れるまでの約八年間、府内と豊後、および博多、平戸の各地で多
くの苦難とたたかいながら布教にあたったが、ポルトガルのリスボンで生れたこのイエズス会士の一五六二年（永祿五）の書
翰に朽網とルカスの名がみえる。

「豊後より九レグワの朽網に名をルカスというキリシタンあり、自費を以て甚だよき大会堂を建築し、死者を葬るために
木をもつて一つの地所を囲ひ、中央に石の十字架を建て、己の死したる時十字架の下に埋葬せんことを命じたり」と。

一五五五年（弘治元）、ルカスからの要請によって、バルタザール・ガーゴ司祭は、日本語を理解できるジョアン・フェル
ナンデス修道士、「高い声で石のような心をも破る」ほどの説教師パウロ（府内の日本人キリシタン）およびアントニオの四
人で朽網にでかけ、ある者は説教し、ある者は祈祷を教えた結果二百六十人がキリシタンとなり、ルカスの家族だけで洗礼を
受けた者は六十人に達した。ルカスはまた邸の傍に教会を建て、それは豊後で建てられた最初の教会であった。

なお、この地方一帯の領主であるケイミドノ（三河守、朽網鑑康）も「デウスの教」を聴いて大いに喜んだが、キリシタン
になる前に先づ王（大友義鎮）の意向をきかねばならない、ということでも自らは洗礼を受けなかった。鑑康は、これより三十
二年後の天正十四年十二月（一五八七年一月）豊後に侵攻してきた島津勢のよって山野城に籠城を余儀なくされ、病死するの
であるが、キリシタンになったという記録はみあたらない。しかし義鎮のキリスト教に対する姿勢にならぬ「領内においてキ
リシタンとなる者はこれを保護し、領内の者皆キリシタンとならんことを望んだ」結果、朽網キリシタンの総数は三百人に達
したのである。このなかには「朽網殿がいつも相談相手としており、領内の管理を担当している二名の重立った人」がふくま
れていた。この二人とは古庄山城守と古庄丹後守ではあるまいか。朽網の領主は別として、家臣の相当数がキリシタンとなっ
たことがうかがえるのである。因みに当時府内のキリシタンは約千五百人であった。

一五五七年（弘治三）一月、全日本布教長として府内にいたコスメ・デ・トルレス司祭は、豊後にきて六カ月のガスバル・

ヴァイレラ司祭とジヨアン・フェルナンデス修道士を朽網に派遣した。その途中でみられた奇蹟についてヴァイレラ司祭は次のように書いている。

「洗礼を授かった人々の中に七十才になる跛足の老人がいた。彼は自分の家で説教をしに来ていた。彼は六、七年の方、この病気を患っていて、話しをすると必ず全身が震えていた。これは全く驚くべきことであった。彼は以前、大の偶像崇拜者であつて、悪魔を、その化身の姿で拜んでいた。彼はキリシタンになるや、それから二日後に、我が主の思召しにより全身の震えが止まり、健康となつて起き上つた」

ヴァイレラ司祭たちは、この土地を去つて朽網に赴いたが、道中の苦勞には並々ならぬものがあつたことは容易に想像するところができるのである。

「夜になつて、いつのまにか非常に高い山に来てしまつており、そこには道も小径も、家屋もなく、行き先を告げてくれる人は誰もいなかった。そこで途方に暮れたので、主なるデウスに身を委ね、どこで道が終つてゐるか判らぬまま、大きい谷川が流れている一つの谷に降つて行つた」

この道は一体現在のどの道にあたるであらうか。府内から朽網への道は、芹川沿いと七瀬川沿いと二本が考えられるが、恐らく後者の方ではあるまいか。その道は、府内から大分川右岸に涉り、木ノ上から廻栖野、今市、神堤、追分を経て北上し朽網に入る道である。これは近世になつて肥後街道となるルートである。しかしヴァイレラ司祭一行は道に迷つたために、今市を過ぎてから後、「大きい谷川」が流れている芹川の谷に出たのではなからうか。

司祭たちは、このような苦難のち朽網に入り、そこでキリシタンたちを訪ね、また異教徒に説教したところ数名がキリシタンとなり、領主朽網鑑康は、キリシタンの部下たちが非常に忠実であるとして、その態度ゆえにいっそう彼らを尊重した、という。

一五五八年（永祿元）にはガーゴ司祭とルイス・デ・アルメイダ修道士とが朽網に赴いた。アルメイダ修道士はかつて富裕

な貿易商人であり、外科医の免許をもっていたが、五千クルサドの財産をなげ出して府内でイエズス会に入会、修道士として働いていたのである。同修道士は朽網キリシタンの頭かしらの家で「二十年間病気で苦しんでいた男」を療治してこれを治したのでキリシタンたちはいよいよ信仰を堅めるようになった。アルメイダ修道士はすでに前年から府内のイエズス会経営の病院で診療を始めており、その名声は遠く都、堺、坂東および比叡山にもきこえ、これら各地からもやってきて、外科と内科の治療を受けた者は二百人をこえる、という盛況であった。入院患者たちは病院で祈禱を習い、熱心な人たちには洗礼が授けられたのである。しかし二年後、イエズス会では会士が直接施術や医学教授にあたることを禁止し、その命令が日本にも達したので、アルメイダ修道士は医療の第一線から退いて「一生ける車輪」さながらに東奔西走、布教に専念するようになる。

当時の布教地は、府内、朽網、平戸、博多、鹿児島、山口、都および堺の八つの地方で、イエズス会士はトルレスおよびヴィレラの二名の司祭と、フェルナンデス、ダ・シルヴァ、アルメイダおよびペレイラの四名の修道士の合せて六名であった。このような状況のもとにあつて、一五六一年（永祿四）、フェルナンデス修道士は一カ月あまり朽網に滞在し、キリシタンたちを巡回訪問した。そして同地の会堂について「大きさはもと国王（義鎮）の宮殿（屋形）なりし当市（府内）の会堂に劣らず、これよりも立派なり」と賛辞をおくっている。このことばから、地域での信仰の高さと、かなりの経済力があつたことを端的に知ることができる。

同じ年の十二月に、薩摩のキリシタンたちを慰めるため、ルイス・デ・アルメイダ修道士が派遣され、告白のため豊後にきていたポルトガル船の総司令官マノエル・メンドンサー一行が同行した。薩摩へは府内から朽網を経て肥後の川尻へ出た。このときの心のこもった温かい歓迎と教会（会堂）の見事さについてつぎのように述べている。

「朽網のキリシタンたちは、あらゆる必要な品をいとも愛情をこめて私たちに給してくれ、私（アルメイダ修道士）はどうか感謝の言葉を述べてよいかわからぬほどでした。教会は実に立派に造られていましたので、ポルトガル人たちはそれがあまりにも敬虔さに満ち清らかであるのを見て、このような僻地で、しかもほとんどまったく予期することもなくこれに

接したために、感涙を禁じえませんでした」

一五六二年（永祿五）の夏、それまで六年間府内で働き、「デウスからまったく特別に涙を与えられた」コスメ・デ・トルレス司祭は、フェルナンデス修道士らと横瀬浦へ赴く途中朽網を訪ねたのである。西彼杵半島の北端に位置し、平戸にかわる寄港地の横瀬浦には、かつて「支那の港」とよばれていたマカオから総司令官ペロ・パレート・ロリムの船が入港していたからである。トルレス司祭の一行は「第一日来民（朽網）」といふキリシタンの村に宿泊し大いなる愛をもって迎えられたり。つぎの日ミサを行いたる後彼等に告別し、或者は途中まで見送りたり」と。トルレス司祭はこのときを最後に、豊後には再び帰ってこなかった。この年義鎮は入道して宗麟と号し、臼杵丹生島に築城してここに移居している。この時点での宗麟のキリスト教への帰依は遂にみられず、横瀬浦（大村領）へ向うトルレス司祭の足どりは重かったのであるまいか。

一五六四年（永祿七）秋も深まった頃、ルイス・フロイス司祭とアルメイダ修道士とが、島原から肥後の高瀬を経て府内への途中朽網に立寄り、翌六五年にはジョアン・カブラル司祭とミゲル・ヴァス修道士とが同じコースを通過して朽網を訪れ一泊している。このときの朽網のキリシタンは約三百人とあり、十年前とほぼ同じである。この数字は、島津勢の侵入によって大友氏の豊後が崩壊する一五八七年（天正十五）まで、多少の増加をみただけでほとんど変らなかつたようである。

ジョアン・カブラル司祭がみたこのときの朽網のキリシタンについて、同伴者のミゲル・ヴァス修道士は次のように書いている。

「パードレ（ジョアン・カブラル）は島原を出発して諸聖人の祝日（一五六五年十一月一日、永祿八年十月九日）の前夜朽網に看きたり。同所には約三百人のキリシタンあり、うち若干人の訪問を受けたり。パードレがミサを行ひし会堂は甚だよき一人のキリシタンのものなるが、この老人の名はルカスといひ、その妻とともに修道者のごとき生活をなせるをもつて評判あり、兄弟等（イエズス会士たち）もすでに聞き及ばれたるならん。彼は大家族を有し、当所の諸キリシタンの大なる尊敬を受け、我等の主デウスに尽すところ多し」

翌六六年五月には、それまで五畿内で六か年あまり働いていたガスバル・ヴァイレラ司祭が豊後に戻って朽網を巡回、また同年秋にはベルショール・デ・ファイゲイレド司祭がこの地を訪れている。以下ファイゲイレド司祭自身の一五六七年九月二十七日（永禄十年八月二十五日）付の書翰から朽網についての部分を引用したい。

「朽網の町に居住せる、身分ありまた富裕なる人信仰冷えしが、（……）説教を聴きて洗礼を受くるために、兵士なる三子と非常に愛したるただ一人の娘と、未だキリシタンとならざりし妻および全家族を連れり。（……）このキリシタンは名をジャンといひしが、農夫、僕婢その他使用人を有し、彼等一同を善導するためパードレとつぎの巡視の際長く滞在する約をなせり。朽網の町のキリシタン中に身分あり富裕なる者二人あり、一人はルカスといひ、（……）信仰堅く熱心にしてよく救の秘義を悟り、会堂において多く教訓を与ふ。（……）他のひとりなるヤゴブはルカスの居る所より約一レグワ離れたる村に居住し、（……）甚だ老令であるために（……）パードレ（ファイゲイレド司祭）の方から同所に赴き、説教の結果、ヤゴブの親戚ならびに隣人知友等四十人帰依せり」

その後一五六九年（永禄十二）にも、ファイゲイレド司祭は朽網を訪ねている。しかしこの年、朽網氏は、清田氏、一万田氏とともに大友勢の一翼をにない、筑前多々良浜で毛利勢と戦い、これに動員されていたために、「家中の一武士の家人十二人また十五人」がキリシタンとなるにとどまっている。

一五七三年（天正元）には、トルレス司祭の後任として全日本布教長の職についていたフランシスコ・カブラル司祭がジョアン・デ・トルレス修道士（日本人）とともに朽網を訪れている。その後五年間の空白があつて、一五七八年（天正六年、この年宗麟はフランシスコ・カブラル司祭によって受洗）にはルイス・フロイス司祭がロケ修道士（日本人）とともに朽網を訪れている。同年九月三十日（天正六年八月二十九日）付の白杵からの彼自身の書翰で朽網巡教を次のように書いている。

「予（フロイス）は日本人修道士ロケとともにミサを行ふ器具を携へ、今日まで見たるうち最も難儀なる道を約九レグワまたは十レグワ行き、修道士ロケと分担し、予は毎日二回告白の儀式ならびにキリシタンに説教し、修道士は異教徒に対

して二回の説教をなせり。然るに予は十五日の後病に罹りてこれを継続すること能はざりしが、我等が行きし二つの町に
おいて多数のキリシタンの告白を聴き、(……)新に六十六人洗礼を授けたり」

「救民記」によると「大友宗麟公ノ時、耶蘇ノ会主ノ僧ヲ救民氏ニ遣ラントセシ時、(朽網)鎮則是ヲ(大久保)藏人ニ命
ジテ梨原ニ出迎サセ、追返サシメシ事アリ」とある。鎮則が鑑康のあとをついで領主の地位についたのは、天正三年(一五七
五年)とされており、またキリスト教に対して鑑康のように好意的でなかったところから、「耶蘇ノ会主ノ僧」とはフロイス
司祭のことかもしれない。書翰の文脈からすると、朽網巡教に出かけたもののそこには入れず、その途中の「二つの町」で布
教を行なうにとどまったのではあるまいか。

一五七九年(天正七)、大友氏の日向からの敗退後豊後の政情が不穏になったとき、府内から二人の修道士が祭服、祭具類
を朽網に疎開させ、かなり長期間滞在しているが、恐らく巡察使のヴァリニャーノ師が、翌八〇年九月、府内に到看する以前
には引揚げたであろう。

朽網を最後に訪れたイエズス会士は、ジョアン・デ・トルレス修道士で、それは一五八四年(天正十二)のことであった。
同修道士は玖珠の地で首領たちの大半と三百名近い家臣に授洗したのち「豊後の主要な国衆の一人である」朽網殿に会いに行
った。朽網殿は「国主(義鎮)の説得もあって何年も前からキリシタンの教理の説教をきいていたが、仏僧や親戚の反対のた
めに、説教の聴聞と受洗を中止せざるをえなかった」のである。これは豊後の国では誰でもキリシタンになりたいものになっ
て差支えない、としながら老中、国衆、貴人および館^{やかた}での奉仕者、の四種の人達を例外とする義統の対キリスト教施策にふれ
るからであった。

朽網では信仰の篤いルカスを大きな柱として、三百人あまりのキリシタンが生まれたが、領主のキリスト教への帰依は遂に
みることができなかった。しかし豊後では府内についていち早く信仰の種がまかれた朽網では、ときに中断することはあつた
ものの、三十余年間にわたり、イエズス会士たちの熱い布教活動がみられたのである。

天正十四年（一五八六）、島津氏の進攻によって豊後の崩壊がはじまり、豊後にいたイエズス会士たちは山口を経て平戸にのがれ、続いて大友宗麟の死去、秀吉によるキリスト教禁止令へと時代が動いていくのである。しかし肥前にあって禁止令の行方に注目していたイエズス会では、それが予想されたほどきびしいものでないことがわかると、司祭三十七名、修道士七十二名の合せて百十六名のイエズス会士たちの再配置による布教組織の整備をはかり、一五八九年（天正十七）には豊後に司祭二名、修道士一名がおかれ、一五九二年（文禄元）にも同じく司祭二名、修道士一名がおかれている。しかしこの年のイエズス会の史料によると「豊後にはかつて二万人以上のキリシタンがいたが、現在は四散しており、教会はひとつもなく、司祭は潜伏を余儀なくされている」とあり、島津氏の進攻以後の豊後の荒廃をうかがうことができる。もっとも一五九八年（慶長三）には「豊後では信者一万二千人と数えられた」とあり、関ヶ原の戦いのあった慶長五年には「異教徒である数名の大名が分有していた豊後には、千五百人の信者がいた。神父一人と修士一人とがこの国を訪ねたが何の故障も起らなかったし」引続き天主堂の建設や受洗者の増加がみられるところから、教勢が次第に回復してきたわけである。

さて大友氏の除封が文禄二年（一五九三）におこなわれ、朽網は中川氏の封地となった。かつて志賀氏の末期天正十四年（一五八六）、岡城内に宣教師が駐在し、志賀の住院レザンシアと呼ばれていたが、中川氏に代ったのちも「別に変わりもなく、そのままであった（慶長十八年）」ので、宣教師たちは古い布教地でもあり距離的にも近い朽網へ足を運んだはずである。しかし翌年には慶長の大道放があつて、宣教師たちはマカオ、マニラに追放されるが、これをうけて岡藩での切支丹改めは大追放から六年後の元和六年（一六二〇）に行なわれたのである。その状況は「豊後では岡の領主中川久盛の探索で、一時教会の平和は乱された。然し自発的な亡命者が数を増してきたため、それは沙汰止みになった。領内の人口の減少するのを憂えたのである」となっている。

朽網のキリシタンもあるいは何人かが「自発的な亡命者」として逃散したのではあるまいか。以後寛永十八年（一六三九）正保四年（一六四七）、承応三年（一六五四）と切支丹改めについての御定書がでており、この時代ですすでに藩政として定

着しているとみることができると。

直入町の神堤、栃原、長野および上野の各集落に、合せて百をこえるキリシタン墓があり、その一部には享保、元文、延享安永などの年号がみえる。これらの年号からみると、朽網のキリシタンは宗門改めのきびしい迫害下にありながら、いわゆる「隠れキリシタン」として十八世紀の終り近くまで生きつづけたものとおもわれる。

最後に、直入町長湯字原の、下河原のキリシタン墓として知られているT字型の墓碑についてふれておきたい。墓碑の高さは三十七・五センチ、厚さ十二センチ、基部の幅十七センチ、Tの字のヨコイチの部分は最も長いところで三十四センチありその前面に「NRI」と線彫りの欧字が認められる。「NRI」は *Jesus Nazarenus Rex Iudaeorum* の頭文字からとったもので「ユダヤ人の王 ナザレのイエス」を意味し、キリストが十字架にかけられたとき罪標すてがにこのことばがしるしてあった、とされている。この墓碑は、全体のバランスからみて、つくられたときにはもともと大きな十字架であって、現存するのはその最上部の一部分であろう。また場所についても現在地の近くではあるが、少しばかり高いところにあつたらしい。はじめにも述べたように、イエズス会士としてこの地を訪れたガールゴ司祭の書翰のなかに、ルカスが「石の十字架」を建てた、とある。これがそれにあたるとすればすでに四百年を経ているわけである。

西の空を茜色に染めて、朽網山の彼方に陽の沈むころ、朽網のキリシタンたちはこの「石の十字架」を仰ぎながら夕の祈りをささげたのではあるまいか。

(大分市上野六坊町四組 大分県総務部総務課県史編さん室囑託)

引用文献

岩波古典文学大系第六卷 萬葉集

角川日本地名大辞典 四四 大分県

村上直次郎訳「イエズス会士 日本通信 上」

ヴィッキ編「ドクメンタ・インディカIV」

松田毅一・川崎桃太訳「ルイス・フロイス日本史」第六卷

ロベス・ガイ著井手勝美訳「十六世紀キリシタン史上の洗礼志願期」

大分県教育委員会編 大分県文化財調査報告書 第四十五輯「肥後街道」

村上直次郎訳「イエズス会士 日本通信 下」

大分県郷土史料集成 戦記篇(一) 「大友興廢記」

ヨセフ・フランツ・シュツテ編「イントロダクチオ・アド・ヒストリアム・ソシエタテイス・エス・イン・ヤポニア 一五四九—一六五〇」

大分県郷土史料集成 戦記篇(二) 「救民記」

松田毅一・川崎桃太訳「ルイス・フロイス 日本史」第八卷

ヨセフ・フランツ・シュツテ編「モヌメンタ・ヒストリカ・ヤポニア I」

レオン・パジェス 吉田小五郎訳「日本切支丹宗門史」上卷

北村清士校注「中川史料集」

「広報直入」昭和三十八年一月一日号半田康夫「新たに発見した豊後のキリシタン遺跡・遺物」(大分大学学芸学部研究紀要 第七号)